Wilson 974 / May 12 1888 No 109

廿一年五月十二日發兌（版權所有）

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢 府内無税 郵税一錢 毎土曜出版

第百九號

社説
自奮の精神

論説
兩竪王を退去せしむべし（中島俊子）○離婚法（忍月居士）○日本洋装の婦人（イーストレーキ夫人）

叢話
宣教師セーリ氏細君に金製を捧ぐ○落花豈無情哉○小供私已の衛生（大澤謙二）○瓜や茄子の花咲り○○正念坊の一枚起請○○愛と名譽の歌（米國一婦寄送）譯（しのぶ）○百人一首（鈴木弘恭）○指環考（久松定弘）

小説
小説神髓

佳傳
エリヲット女史

寄書
小供の話
賢こき仕立屋

新報

外報

（附錄）萬國婦人大會景況錄

許知堂中川昇刻

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 109, May 12th, 1888.

EDITORIAL:— Woman's Self-Respect.

LEADING ARTICLES:— Japanese Dress, by Mrs. Eastlake (Concluded); The Two Devils Must be Cast Out, by Mis. T. Na'kashima; Thought on the Systems of Divorce, by N. G.

MISCELLANIES:— Rev. Jay and his Wife; The Voice of the Falling Flower: Children's Health, (III). by Prof K. Osawa; "Uriya Nasubino Hanazakari" (A Parody on the Characteristics of the Age.); The Death-Bed of Priest Sho-Nen; "Love or Fame" (An English Poem) by Miss C. Dorsey, and its translation; Short Conversations on the Hundred Oles by a Hundred Poets: No. (IV.); Finger Rings(II.), by Dr. S. Hisamatsu.

NOVELS:— Bouquet of Novels.

BIOGRAPHIES:— Jeorge Eliot.

CHILDREN'S COLUMN:— A Wise Tailor.

GENERAL NEWS.

SUPPLEMENT:— International Woman's council.

前號(第百八號)目次

●社説 理想之佳人(第五)文明國民の理想
●論説 日本婦人の洋裝(イーストレーキ夫人)○家内經濟の大要(木村熊二)○婦人矯風の手段(田村直臣)
●批評 禁酒美談
●叢話 戒指考(久松定弘)○小供私己の衛生(大澤謙二)○百人一首一口話(鈴木弘恭)○チッキ妹の送金を返す○應擧の鷄
●小説 小説神髓
●佳傳 ルウテルの母
●寄書 文苑○歌三
●小供の話 賢こき仕立屋
●新報 時事新報と日本女子○女生徒の化粧 其外

●珊瑚の珠 (第六十五回)

○ゴールトスミス田舍牧師を吟じて曰く彼は人の爲に感じ愛し泣くと雖ども然れども其の最極の思念は天に在つて安んず喩ふるに高山谷底より起り中間に迅雷暴風を纒ふと雖ども而も其の頂上に常に永遠の日光を見るが如し。

○ブルータスはシーサーの爲に哭して曰く彼れ吾を愛したるが故に吾之が爲ゝ泣きたり彼れ幸福を得たるが故に吾れ之が爲に喜びたり彼れ勇猛なりしが故に吾之を賞賛せり然れども彼れ遂に非望を懐くが故に吾之を殺せり。

○アイトウンはクレチコーの寡婦を咏じて曰く女子の一つの武器はソヽリ泣きなり涙は是れ娘兒の頬に恰好なるものなり。

○ヒウミルレル優々として曰く凡そ最上の悟樂を取るには其の價ひ甚だ廉あり而して此の悟樂を取らんとには何如に多忙なりと雖ども亦た其暇まなきに非ず。

○ムーデー曰く細事を好まざるものは神の命を聽くと能はず彼の大事を爲さんと欲して常に其の機を待つものゝ如きは決して何事をも爲し得べからざる也。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第百九號　明治二十一年五月十二日發兌

社說

○自尊の精神、

編者述

佛說に申す、昔し釋迦如來降誕の時、右手を擧て天を指ざし、左手を下げて地を指ざし、天上天下唯我獨尊と云れた。然し玆に述ぶる所ろの自尊なるものは、斯の如くに自から尊とむの謂ひにあらず、只だ能く吾の吾たるを知つて、此の吾の亦た為すあるに足るヿを、正當に覺悟するの義です。即ち吾は一個の人間である、万物を支配し得るの靈長である、吾の才能は最と小さしと雖ども、若し之を伸せバ天地を覆ひ、山川を御するに足ると信じ、決して自暴自棄の懼れむべき有樣に陷いらんようにするヿであります」諸君嘗て海洋を横ぎりたるヿありや、望み見る渺茫として水天極まる所ろを知らず、高濤大波、連山の起伏する如くに見へたり、然るに一艘の燕瀛船は、煙を吐き、波を蹴立て、シャッ〳〵として此の大洋海を渡り行くです。人若し甲版上に立つて此の壯大なる景况を見れば、ア、燕瀛船よ何如に汝ぢは勇猛大膽なると申したう存ぜらるゝであらう、然し其時に思ふべし、此燕瀛船は人間の製造したるものである。斯て天黒く波白く、最早や夜と相成れば、一輪の月太空に懸り、錦波數万里に渡り、四面沈々として、たゞ波の音、瀛關の音を聞ます、此時仰いで彼の月を見れば、ア、何如にも壯嚴至極なるかな、白光燦爛、高宇漠々、抑も何んたる大美妙ぞや、然し此時に喜ぶ、吾は人間にして、此の造化の造り主を悟り、其の大智大能を信じて、之を崇拜するヿが出來るものである」若しも箇樣にして靜かに我一身を顧みるときは、吾は亦た是れ一箇の人間、一個の大ひなる靈を保つ所ろの者であると覺悟さるゝ、之が即ち自尊と云へる義にして、吾人は此の自尊の精神の、甚だ大切であるヿを申したい。

蓋し若し、此の自尊の精神が十分であらば、民權を重んずるとも隨つて固からう、一國民の元氣も亦た隨つて熾んとならう、文明の進歩も亦、甚だ確固に迅速であらう。然るに、若し不幸にして此の精神なくんば、是れ即ち、靈なきの佛像、精なきの花の如し。何如に目を眩ますの器具重寶ありとも、何如に巨万の富ありとも、よし又何如に非常の才藝ありとも、何んの効能もなきものと爲つて、人にも、家にも、一國滿天下の上にも、毫末の功はしなきものと爲る。

左らば貴孃方、どうぞ此の自尊の精神を發揮し、其の學問を爲さるゝにも、其の學問を實地に用ひらるゝにも、何卒此の精神に圓滿さるゝよう致したいです。然れば吾人は、貴孃方に自から怜れと申すではない、自ら驕ぶり玉へと申すではない、只だ自から尊とみ玉ふべしと云ふとである。凡そ一個の人間たるものは、皆な天賦の力を所有して居る、故に苟くも暗愚でない限り、狂氣でない限りは、若し其力を伸ばすときには、遂に大に之を發達し得ると信ぜらるゝとです。成程貴孃方は今ま小さき種であらう、小さき小供であらう、然し此の小供は後に大人となるべきもので、彼の最と小さき種も、後には鳥を捿まはすべき大木となるものである。故に此の、後ちには遂に發達を得べしと信じて、今より能く自から尊とむ所ろの精神がなくては成らん、若しも此の精神なくば、迚も其の學問が成就いたすとは無いです。好し又幸わひにして其學問成就したりとも、苟くも彼の精神が無い以上は、之を實際に使用して國家の益を圖るとは、迚も出來ないです。吾は眞とに小さきものなり、然れど又爲す有るに足るべしと信ぜずば、此の荊棘多き世の中に、一事業をも爲すとは出來ん。どうぞ貴孃方、先づ此の精神に充ち滿つるよう奮ひ起り玉へ。

實に此の一義は、古へより先達か尤も注意して敎へ置かれたとで、或は「君子重からずんば威あらず」と云ひ、或は「自から輕ろんずるの人は爲す有るに足らず」と申して、之は論語孟子に於て既に御覽なされたであらう。又西洋の名言にも、「人は先づ自から知るを要す、然し更に宜しきは、其の自から爲す有るに足るを知るを要す」とある。今ま古今の歷史を見るに、希臘羅馬の盛んにあつたるは、民に自尊の精神が充滿したるからであつた。而して其の遂に滅亡するに至りたるは、亦た民に自尊の精神が衰ろへたるゆえであつた。國民に此の精神の盛んなりしときは、敵國の侮どりをば受けず、國内の自由權を伸張し、元氣勃々として大進歩を爲したると、東西の歷史を通覽したるものゝ、尤も容易に承知し得る所であります」又彼の君子英雄の傳記を見るに、凡ろ大ひに事を爲したるの人は、即はち亦た大に自尊したるの人であつた。後醍醐帝、笠置山に漂泊らひ玉ふ時、正成は、自から信じて隱れ家より出でました。天下分裂し、英雄割據するとき、孔明は自から信じて、其の書齋より出でました。チャーレス一世の政事宜しきを得ず、民の自由の蹂躙せらるゝとき、彼のクロムエルは鋤を拋うつて起ちました。然れど斯る花々しき、斯

る壯んなる場合にのみ、自尊の精神が見はるゝにはあらず。撥亂反正の大志ある家康は、平安の爲めに先づ屈することも出來ます。王家の讎を復さんと念願する張子房には、先づ老人の履を取ることも出來ます。我が民の爲めに、我が國の爲めには、皇帝、一奉公人と爲つて外國に修業することも出來ます。此等は皆な、自尊の精神に圓滿して暫らく身を屈むるものでありませう。

そも〳〵、人間は五尺の小動物である。彼の山に比ぶれば固より小さい、彼の川に比ぶれば固より短かい、然れど玆に一つの精神あり、此の精神によつて、我が抱く所ろの靈魂を發達せば、山も川も皆な目前に伏服することゝなります。左れば姉妹よ、乞ふ自から輕ろんずる勿れ、先づ其の人間たることを信ぜよ、而して人間の靈は、古今將來、天地四方に、廣ろがることの出來るものと信ぜよ。楠氏は湊川にて打死したり、左れど、今の小學校の唱歌の中にまで、其の精神は立現らはれて居る。孔子は何も爲さずして苦しみ死にし歟、支那の歴史を見るに、其一枚〳〵に孔子の精神が貫通して居る。ワシントン當初の清潔なる志想は、西大陸に一個の自由國となり、今の亂世に優々として、消遙して居る。彼のソクラット、彼のカント、其の思ひが肉體と共に滅したりと思ふ勿れ、其の熱腦の志想は、今も尚ほ現世界に實在して居ります。

姉妹よ、左らば先づ自から敬し玉へ、其の操ほ、其の權、之は決して人の爲めに毫末も侵さるゝこと勿れ。一個の人間たりと、確く信ぜよ。人間の權理は天上天下に得て侵し得るの人あらずと信ぜよ。而して之を守る爲めには、宜しく斷乎として決定すべし。西洋の婦人はピストルを持てり、日本の婦人は懷劍を持ちたり、今まはピストルにてなく懷劍にてなくとも、乞ふ斯の如く凛然として自から防禦するの覺悟を確しかと所有せよ。

そうして次に覺悟すべきは、其の能く爲すあるに足るを信ずることなり。彼の妙齡軟弱の一少娘も、一たび奮るひ起るときは、クライミヤに向つて、死に瀕する無數の病者をいたはることが出來ます。たとひ學も金も地位もなしといへども、若し慈善の心に動かさるゝときは、彼の地中の囚人、世外の惡人どもを、悔ひ改めに導くことが出來ます。或は一枝の筆を以て、滿天下の道德心を動かすことも出來、或は眇乎たる一身をさゝげて、遂に女子大學の基礎を立ることも出來ました。左れば自から信ぜよ、自から爲す有るに足るを信ぜよ、吾は數多

の財力を要せず、吾は何もうらやむ所ろなし、顧みれば、此の立派ある魂しひ、此の立派ある靈魂を賜わって居る、願ふ所ろは、此を發達して、以て國家の御爲に使ひたく存ずるとである。

嗚呼わが同胞の姉妹。特に善を樂しみ、正を慕ひ、道の爲めに粉骨碎身せんとを期する所ろの、敬愛する姉妹よ。今日に落す一滴の涙は、是れ徒らに乾くべしとは思ふ勿れ。今日にそゝぐ一滴の血は、是れ徒らに消ゆるとは思ふ勿れ。今日に身を震るはして祈禱念願する此の純潔ある精神は、遂に乍まちにして斷絶するとは思ふ勿れ。凡そ一たび落す涙、一たびそゝぐ血は、決して滅するとなし、必らずや其のむくひあらん。好し吾は半途にして倒るゝとも、吾が事業は未だ成らざるに、倒るゝとも、然ど是全く倒るゝものにはあらず、彼の源泉たる小さき泉の水も、遂には同流を合はせ合はせて、洋々たる大海に入らん。凡そ義者の一涙一血一精神は、遂に其相續人を得て大ひに成就するの時なからんや。左れば姉妹、何卒自から信ぜよ、自から重んぜよ即ち自尊の精神を大に發揮する所ろあれよ。

小兒は何の用をも爲すまじ然れども後には大人と爲る(フランクリン)

論說

○兩魔王を退去せしむべし　特別寄書　中島俊子

福分の齊しからざるは人間の常とは口に云ひ得るも心には中々諦らめ難きも無理ならぬ事にして他人の快樂は他人が實地感じるよりも猶一層快樂をして己が眼頭に浮動して了に去るを得ざるは蓋羨魔の玩ばるゝ處となるべし又自分が不快樂は他人が毫も知得し能はざる點に貯へ來つて唯々積で一身を埋るものは又蓋愁魔に誘はるゝなるべし羨魔ならざれば愁魔々々ならざれば羨魔人間殆んど此兩魔王の支配する處とある豈遺憾あらずや人間の中にも尤も此支配に與る多きものは女性ありとす學校にありて日々の學課を脩むる暇なき暇にも腦髓は忙はしく同窓數百名學徒の身邊を馳せ去り馳せ來りて休むとなきは皆衣帶の綺麗不綺麗容貌の美不美を周覽し纏て一團丸と爲し羨魔の支配を受くるの材料に供し花見に名を藉る春遊にも山川の秀媚桃李の錦繡敢て己に用あきもの丶如く唯左眦右睚行人に注目して腕車の繋きに困じ演劇には幕中の長きを覺へず滿場幾多の娘子軍を見渡すに猶眼力の鈍きを憾む如き皆羨魔に奉公するの下働ならずや其他之に類するもの孔だ少々ならざるべし此の如き羨魔に惑るゝものは早く保安條

例を施行して千萬里外に退去を命ずるに非れば高尙潔白の思想を發育するに障げあるべし今日學齡の姉妹は家僻地陬村に在るも慈愛なる父母の恩德により裕かなる學資を得て嫩緑芽を爭ふ紅娘紫孃と都會の學苑に徜徉する間は唯羨魔の何物たるを知るのみにして愁魔の何物たるを知らざれど今日恰も半途に會する中年の妻君が中には古有の愁魔にあらずして一種新來の愁魔が襲撃を蒙る人の少なからざるは近時遠國處々より來訪を辱くする姉妹が談話中の語氣にて察し得らる此姉妹が胸中は實に愛すべき憐むべきものあり此姉妹等が嘆じ玉ふ所は他に非ず時に後れたりと曰ふの數語に外ならず既に老婦人と呼ばるゝ人にありては明かに昔人と云ふ看板を皺顏に掲ぐるを以て敢て咎むる者も非されど中年の者に至りては未だ此老婦人が仲間に入ることも成らず又學園に五六年を費やせし婦人とも伍を爲すを得ず最早此儘にて已まんか如何にも殘念なり今より始めんか既に婿あり兒あり舅姑あるを奈如せん嗚呼奈如せん奈如せんの凝結は破裂して寧ろ昔の如く獨身となり都會に出て負けず劣らず一勉强をせばやと思ひ立つに至ると同時に夫婿の濃かなる愛と雛兒の笑はんとする顏せは忽ち身前に遮り來つて頓に無分別は消失するの幸ひあるも此念常に已むことなく快々として樂しまざる餘沫は迸りて夫婿舅姑に布及して一家の和氣を減ずるに至るべし余此不幸なる姉妹に忠告せんと欲するものは姉妹が成らざることを希ひ復らざることを悔ゆる事なく假令己れより年少のものと雖も或は學校にありて敎育を受けしか又は否らざるも都會の狀況を熟知するの婦女等には親く交りを爲して知らざるを聞き又讀み易き書籍をも就て學びなば日に日を累ね年に年を累ぬる間には終に普通の事は知らざることなきに至るなるべし而して其外君が職業は唯外君のみ能く之を爲す己は其職業より生ずるの利を以て衣食を作るものなりと云ふ簡短なる役目氣取を廢し何迄も外君が職業を扶くるを以て實地の學文と思ひ玉ふて倦み怠るなくんば姉妹が悲しき別れを爲して百里外の學校に來らざるも學校却て姉妹の家に生ずるを得べし姉妹よ姉妹が家に生ずる處の學校に就て學び玉へ必ず成らざるを希はしめ回らざるを悔ひしむる愁魔の支配を受け玉ふ勿れ。羨魔に惱むの姉妹よ姉妹は時に後るゝの姉妹ならずして時に會するの姉妹なり右愁魔に惱むの姉妹が可憐の狀況を推量して徒らに羨魔を以て今日を過る勿れ。

鶴の足長しと雖ども斷つ可らず鴨の足短しと雖ども接ぐ可らず。

○離婚法に就いて所感を陳ぶ　忍月居士

人間の最も重ず可き者ハ結婚より甚しきハあらざる可し、人間の最も痛む可き者ハ離婚より甚しきハあらざる可し然るに彼の重ず可き結婚を輕んじ此痛む可きの離婚を痛まざる者の多きハ余輩大に日本社會の幸福の爲めに悲む所なり其結婚するに當つてや可なる哉此郎、艶なる哉彼女と劇塲の遇會、觀花の邂逅に一決す其離婚するに當つてや些細の瑕瑾卑劣の迷想是れが原因をなす豈に怪訝の事ならずや。

尤も西洋諸國に於ても離婚あり別居あり、少壯の輩一時の熱情に迷ふて男女互ひに厭氣を生し爲めに閨門風波を起し又ハ結婚の後に至り始めて夫婦の性質水火相容れざるを悟り互ひに寢食苦樂を共にするに耐へざる者亦少なからず然れども現今日本の如く離合の輕率甚しきハ非ざるなり（此事社說の日本の家族第六を參照せば可なり）其輕率よりして生ずる社會の毒害、家族の不幸、風儀の紊亂ハ幾何ぞ余をして若し望むとを得せしめば人一度び結婚せば天命を保つの間相互ひに和樂歡寢食を共にす可しと言はんとす然れども人生の事たる望む可くして行はれざる事少なからず故に余は此の如き行ひ難きのとを日本の社會に負はしめんと望むものに非ず只離婚に制限を設けて万巳むを得ざるの外之を行ふなからしめんと欲するなり而して現今は離別の權、一に夫の權内に在つて婦ハ毫も其權なきが如し豈に悲む可く歎す可きの至りならずや是れ亦矯正せざる可からざる也抑離婚の輕率ハ結婚の輕率に胚胎すと雖も亦た人々が結婚を重ぜざるハ職として後に離婚の餘地あるを以てなり、試めして後、氣に入らざれば勝手に取換ふるとの容易なるを以ッてなり然らば玆に離婚の範圍を狹くせば隨つて結婚の最大禮なるとを覺知するに至らん、是に至て社會毒害消滅す可し、家族の不幸退除す可し風儀の紊亂亦た矯正せん。

古に溯つて太寶令を按ずるに當時すら既に離婚の制度を設けて云々の箇條を具備せざれば離別を爲すとを得ざらしむ往古未開の世既に此の制限あり而して數十世を經過したる、文明と自稱する今日に於て離婚を見ると塵芥を放擲すると一般なる豈に祖先に對して恥づ可きの甚しきに非ずや太寶令と雖も今日の眼より見る時ハ素より非難す可きと多しと雖も而かも今日の殘忍見るに忍びざるが如きの弊風あると比較せば數等優りたりと云ふも不可なかる可し其箇條は左の如し、

第一、子無塲合、即ち結婚後三ヶ年を經も子を擧ざる時。

第二、淫逸なる場合。
第三、姑舅に事へて不孝なる場合。
第四、口舌、即ち夫婦間常に爭論諠譁の絶えざる場合。
第五、嫉妬。
第六、窃盜、即ち妻が刑法上罰せらるゝの行ひある場合。
第七、惡疾、即ち癩病の如き不治の病ある場合。

以上の場合には夫は妻を離別するを得たり(妻は其權なし)然れども若し其妻にして姑舅の喪を經たる時即ち其妻にして姑舅の死を見送りたる場合又は夫にして妻を娶るとき赤貧なりしも其妻來つて以來苦樂を共にし所謂共稼ぎにて漸く赤貧を脫し後家富み衣食に不足を知らざるに至りし場合又は夫結婚の時婦より受たる物品ありて之を返還するを得ざる間は決して右の箇條を有するも離婚を許さゞりし。

今や我國民法の編纂中なりと聞く然らば結婚、離婚の如きも無論身分法中に於て規定せらるべし元より明法官の集合して立法せらるゝなれば時世を救治し女子の幸福を增すは期する所あり故に予が喋々は殆んど無用あるが如しと雖も然れども余感ずる所ありて此篇を艸す故に是より歐米諸國の離婚(別居)法の比較を陳べて次ぎて私見を吐き以つて當路の參考に供せんと欲す是れ强ち無用の事にはあらざるべし。

離婚に關する法律は人民開化の程度若くは人民の歸信する宗敎の差異に由つて各國一樣ならずと雖も之を彙類分別する時は即ち自由離婚、禁止離婚及び制限離婚の三法に歸着す可し。

第一、自由離婚法、とは人民が夫婦の關係を絶つことに於て法律毫も干涉せず只其自由に放任し去る者あり、自由離婚法の理由とする所は承諾に由つて契約せる夫婦の關係は又承諾に由つて之を解くことを得ると云ふに在り此法の行はるゝは概して文明低度なるの國なり猶最も低度なる野蠻國に於ては其夫其妻を見ると僕婢と一般なるが故に苟も夫にして妻を厭ふことあれば勝手に離婚することを得せしむ此の如き法律は夫婦の關係を輕んずるの結果なり。

第二、禁止離婚法、とは夫婦の間柄常に不和にして相互に厭惡し寢食を同ふする能はざる場合と雖も尙ほ離婚することを許さゞるの法なり、此法は主として宗敎に基きたる者にして羅馬カトリツキ諸國に於ては宗敎上の義典となし婚姻は神の意に基けるものとせり「バイブル」に云へる「神の結び玉ひたるものは人之を解くを得ず」との本文に依て制定したる者也伊太利、白耳義及千八百八十三年前の佛蘭西諸國の法律是也

第三、制限離婚法とは其の離婚を人民の自由に放任する法と全く離婚を禁止する法との中庸を取り制限を設けて離婚を許すの法之其離婚を許すの範圍は國に隨つて廣狹ありと雖も要するに婚姻の性質を害すると尤も甚しき事情あければ離婚するを得ざる也例えは英國にては妻の姦通及ひ夫の姦通の一事のみを以て離婚の原因となす普國にては姦通鷄姦背逆の待遇等其他種々の源因を定め其源因の存する時にのみ離婚を許すなり此法は全く社會の公益上より出でたる者にして離婚は禁ず可き者に非ず亦濫りに許す可き者に非ずとの便宜上に基因し當今歐洲耶蘇新教諸國に行はる。

次ぎに離婚に附帶して猶ほ說明を要するは別居法の一事あり別居とは夫婦の縁を絕たず法庭の判定に因つて夫婦住居を異にするの謂ひあり法律上別居を設くるの必要は、

第一、別居を以つて離婚に代用せしむるに在り、例之は羅馬カトリツキ諸國の如く離婚を禁止するの國に於て若し夫妻の一方姦通するか或は虐待して實際同住する能はざる等の場合即ち他の諸國に於ては離婚を許さゞる可らざるが如き場合に際し法律上夫婦の縁は絕たざるも夫婦をして別居せしめ生涯寢食を共にせしめざる之是れ不得巳別居の名義を附したる迄にして其實離婚に代用したるものなり。

第二、別居を以つて離婚を補充するに在り、制限離婚の行はるゝ國に於ては重大の理由なくんば法律は離婚を許さず若し夫妻の縁を絕つに足るの理由なきも實際夫妻相互に厭嫌不和同住し難き理由あるときは即ち別居を許して以つて雙方の便益を謀るなり此の如き國には離婚別居並び行ふ、例之ば英國の如き姦通の一事のみを以て離婚の原因となすを以て苟も姦通の一事あきときは離婚を許さず然し夫其妻を虐使し或は養料を給せざるが如き場合ありて同住する能はざるの事情あるに際し別居を許し以て離婚の源因の狹隘なるを補ふ。

第三、別居を以て離婚の假處分となすに在り、或る國の法律に由れば姦通等の如き重大の理由ありて直に離婚を宣告する場合を除くの外法律上離婚を請求するの理由存するを以て夫婦の一方より離婚の訴を起す時は判事は直に離婚の宣告をなさずして先別居の宣告をなし以て双方の心志調和し再び戀愛の情を發し復緣するの機會を待、此複緣の機會は世上屢々逢遇する事實にして一は夫婦の後悔を空ふせしめず、一は夫婦の關係重大なるを知らしめ得べし政畧上大に便益ある者也別居、數月に亘つて猶ほ離婚を請求して複緣の望なきときは

判事は改めて離婚の宣告をなす可し。

余は之に於て離婚法及び之と密接の關係ある別居法を畧說せり余は切に希ふ吾國に於ても當世の自由離婚法を廢して制限離婚法と爲んことを、又其制限の範圍を成可く狹隘にして適宜別居法を以て之を補綴せんことを是に於か初て吾國姉妹の不幸を救を得可し、風俗の紊亂矯正し得べし、社會の品位高尙に至る可し其効豈小々ならんや聊か感ずる所あり此篇を艸す。

○日本國洋裝の婦人（其二）　イーストレーキ夫人

其の雛形の書附なるもの即ち左の如し、

完全なる形躰、

凡そ其身の躰格何如あらんと掛念するものは下もに示めす所ろの規則に隨つて躬から測る所あるべし。即はち先づ丈の高低に就ては是れ好みの次第によりて相違はあれども彼のビーナスの像が丈け五英尺五英寸ありとて多くの彫刻者技術師は之を以て女子に尤も適當したる高さとは爲せり。又た色合及び格好に就ては玆に荒比亞人が尊崇する一つの犯す可らざる規則あり即はち、

黑かるべきは　髮、眉、睫毛、及び瞳
白かるべきは　皮膚、齒、及び眼球
赤かるべきは　舌、唇、及び頰
丸かるべきは　頸、腕、くろぶし、及び腰
長かるべきは　脊、指、腕、及び手足
大なるべきは　前額、眼、及び唇
狹かるべきは　眉毛、鼻、及び足
小かるべきは　耳、胴の廻り、及び手

扨て丈五英尺五英寸ある婦人は大抵一百三十八英斤の目方あるべし然し若し躰格確かりとしてあれば左程にも目立たずして目方は大に加はるべし。腕を伸せるときは左右の手の中指より中指に至るまで五英尺五英寸にて丁度其の丈と同樣なるべし。其手の長さは右丈の寸尺の十分一足の長さは同じく七分の一胸の直徑は同樣五分の一なるべし。其の股より地に至る迄は丁度股より頭上に至るまでと同樣なるべく。膝は股と踵との眞中にあるべく。臂より中指に至る隔たりは同じく臂より胸の眞中に至る隔たりと同樣なるべし。頭の頂上より腮に至る長さは即ち足の長さに均しかるべく尙又た腮より脇の下に至る隔たりも之に同じかるべし而して其腰の廻りは二十四英寸胴の廻りは三十四英寸尤も腕の上より測りて同じく四十三英寸なるべし。上腕は十三

英寸手は六英寸こむらは十四英寸半股は二十五英寸足くびは八英寸あるべし。更らに言を換ゆれば母指の廻りの二倍は手首の廻り、手首の廻りの二倍が咽喉の廻り、其の廻りの二倍が腰の廻りなるべし。

之に依りて觀れば凡そ中形の婦人には腰の廻り二十四英寸あるが正當なり左れば海を超へて彼方なる我日本の小き婦人方は其の腰少なくとも二十二英寸乃至二十三英寸ありて彼の希臘の美人像に近からんと所云る西洋の風俗を眞似て蜂の如き細腰とならるゝよりは優りたり。眞に思ふ凡そ文明の先進たらんずるときは何故に彼の文明國に於て倘ほ免れざると云ふ不作法なる宜しからざる弊風をば取り用ひねば成り申さゞるや實に瞭解しがたきとなり。左れば此の米國にも亦た英國にも凡そ考深き利巧なる婦人方は更らに淡泊なる更らに健康なる服裝を執用ひて現今の弊風を防止せんと盡力し居らるゝなり然るに日本の貴婦人諸君は之と同時に彼の美術に適ひたる、彼の衣心の好き、彼の尤も健康なる衣服を棄てゝ以て吾々が現に嫌惡する所ろのものを取用せられんとす眞に驚くべきの改良かと存ぜられ候。

昔し人千金を費やして龍を屠る術を學びたるに屠るべき龍なくして一生を空しく送れり。

叢話

○宣教師ゼー氏細君に金嚢を捧ぐ

宣教師ゼー氏就職の五十年紀に當り、教會々員中の姉妹等、金六百五十磅を納めたる金嚢を捧呈したり、ゼー氏之を受けて謝して短簡の禮辭を述べ、述べ去つて則ち之を細君に捧げて慰めて云く、

余は此の金嚢を受けて更らに之を汝に呈す、即はち常に余が財嚢を管理して常に彼の如くに能く之を取扱はれたる、余が夫人たる汝ちに呈す。此は是れ汝ちの樂しみの爲に、汝ちの使用の爲に、汝ちの役立、汝ちの愉快の爲めに、天の汝ちに與へらるゝものと考へ玉へよ。思ふに此は汝ちの夢にだも望まれざりしとあらん、然れど汝ちは實に之を受くるに適當したるものなり。此集會の會主及び信徒たる朋友諸君、諸君はもし、此の夫人が五十年餘の間だ、一個の妻として勞働せられたるの實際を聞き玉はゞ、蓋し何人と雖ども今余が斯の如く之を謝するの至當なるとを奇しみ玉ふまじ。左れば余が此の五十年間、即はち余の一代の間、全く無事に重任を務め了れりとならば、之が爲めに、公衆は何如に此の夫人に負ふ所ろの多かりしやを申し述べざる

可らず。女性を尊敬するの心を、余が心中に大に增加せしめたるは夫人なり。余が種々の誘惑に罹れるとき、これを勵まし、余をして余の責任義務を感悟せしめ、且つ之を成遂げしむるが爲に余を鼓舞し、夕べには余が額ひにそゝぐ所ろの露を拭ひ、數多の困難防害より余を自由にして以て余の勤務を容易にせしめたる、一に是夫人の力なりき。而して諸君の牧師たる余が身躰の健康に注意し、余をして尙ほ今日あるを得せしめたる事、蓋し吾が敎會と會衆諸君が、悉く此の夫人に負ひ玉ふ所ろのものならん云々

評に云く、淸よい哉淸よい哉此の伉儷、即ち祈りして相ひ婚し、祈りして相ひ伴ひ、相ひ祈りして而して其墳墓を同ふするもの也。

○落花豈無情あらん哉

伊川花を觀んとす明道不可として曰く吾等學を故む日も亦た足らず焉くんか觀花の暇まあらん伊川曰く然らず若し之に依て道を察せば天地の美妙亦た焉に在りと兄弟則ち相携へて行く」嗚呼花よ、汝ちの色、汝ちの蜜、悉く是れ徒らにあらず皆な以て其の實を結ばんが爲め歟。汝ち芽を發して人と成りてより未だ容易く花を開かず、幹長じ了り根固まり了り貯藏すでに充實せりや而して後ち汝ち初めて其の花を開く歟。然れど尙ほ未だ輕ろしく之を開かず嚴冬去り溫氣至り時恰も熟す汝ち則ち莞爾として咲らふ歟、但だ其の開くや人の見ると見ざるとを顧みず蓋し深山の奥朝日靜かにかゝやぎ夕日殘り惜しう照るの所ろ滿山人なし、焉然れ共汝ち得々として其花を開く歟。而して其實を大にせんとするものは常に自から儉し先づ餘まり多くの花を附けずして以て後日の勇を養ふ。嗚呼花よ、誰れか汝ぢを無情とせん。

○小供私己の衛生（其三）

大學敎授　大澤謙二述
佃與三郎筆記

然しながら所によれば牛の乳も無い所があるから其時は是非もない稠濃牛乳を用ゐます蘇士國や亞米利加で出來たのが日本に大分參ります然しドロ〳〵になつて居るから之をウスメなければならん水十五分位を入れるのですが何うも砂糖が多過ぎて往けません近來は大分に流行ッてコンデンスミルクで養ッたら母乳を飲ませた時より肥ッた抔と云ふ人もありますが然うもいきません成るべくは飲せぬ方が宜しい是れも矢張其筋の人に鑑定をして貰うがよろしい其外「リービー子」「子ッスル」など云ふ人の拵たのものもありますが何れも餘り善からざる品ですから詳しきとは御話し致しません。

追々世の進むに連れて御婦人方の用が殖へるから乳を飲ませる暇もないで「コンデンスミルク」を飲ませると云ふの人もあるかも知れませんが是れは能くありません今人工で育てた者と母親の乳で育てたものとの躰重の比較をお示し申しませう「ルッソー」氏の試めした所では左の通りであります。

年齢	母乳兒ノ躰重	人工育兒ノ躰重
一年ノ終	九九三〇ガラム	七四三〇ガラム
四年ノ終	一四二〇〇仝	一二〇〇〇仝
八年ノ終	二〇七〇〇仝	一八三〇〇仝

獨り躰重のみならず身の丈に於ても違います今其比例をも序に述べませう。

年齢	母乳	人工
一年目	七三仙迷	六六仙迷
四年目	九八仝	八七仝
八年目	一二六仝	一一三仝

之に因て見れば母の乳に限ると云ふとは分りませう。

次に二歳より六歳までの間は如何なるものを與へて宜しいか食事の度は五度ぐらゐが宜しい日本では大人は先ず三度としても小供に至ては三度の外に朝起るとお目覺しのお菓子ッレから晝前一度晝後一度寢る前と七偏ばかり食べます歐羅巴抔では五度位です餘り間に色々のものを食べさせるは感服しません食品は消化れ易き肉類とか卵とか米飯豆腐などを食べさせてお菓子とか蕈とか皮の堅き果物麥飯澤菴などは餘りよろしくありません中にも蠶豆甘薯豌豆などは腹が大きくなつて大變に往けません然し此等のものが間のたべものになつて居るのは困たものです或は御飯を食べずに間のものばかりで濟す樣なとがあるが能く注意せんとなりません六歳ぐらゐからは可成消化し易き物を撰ぶは勿論なれども先ず大人の食物と同じです此際烟草を吸ふたり酒を飲んだりするとは固より禁じなければならん小供のうちは藥味など香氣の強きもの辛き物などは惡い次には分量だが何時でも過ぎては惡るい小供のうち「ヒキツケ」たりしても吐いてしまへばケロ／＼と愈るとがありますが大抵は食過です。

第二皮膚のと皮膚は急に暑かつたり寒かつたりしない樣にせねばならぬ特に生れたては寒さに堪ないから申すまでもなく注意するが宜しい皮膚攝生の第一は浴法であります即ち産湯をつかつてから後は毎日一度づゝ湯に入れるが宜しい湯の効能は總ての働らきを丈夫にするものです就ては湯の暖かさ湯

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に入れて置く時間などを定めなければならぬが餘り熱いのは宜しくありません攝氏の三十五度華氏なら九十五度がよろしい是れは生れたてのことだが後になれば次第に冷やしても宜しい入湯の時間は六分から八分長くて十分夫れより長くなると惡るいです滿一歳頃になれば毎日入れないでもいゝ少し位鼻風を感たからと云ッても湯に入れても構いません尤も病氣が重いと思へばお醫者に聞かねばならぬがソンナニビク〳〵するには及ばん、又此全身浴の外だが局所浴と云ッて洗いぬぐッて遣のも宜しい腋の下とか股の間とか總て皮の皺の寄る所其他頭部陰部肛門などは能く氣を注けなければならぬ初めのうちは洗ふのにからだと同じ位の暖さのがよろしいが後になれば餘り暖かいのより冷いのが宜しい仕舞には汲立ての水で洗ふのがよろしい容易出來ることですから朝起きた時と夜寐る時に海綿を冷水に浸して洗ひ拭ふもよろしい三歳から四歳弱い小兒は七歳位になれば夏の內は河水浴海水浴などが宜しい是れもからだの爲めになるのです。

序にお話するのは臍の緒だが一番はじめは產婆がして呉れるから宜しいが湯に入れた時は油をしめした布にて能く包んで左りか右か何れにか曲げ繃帶で縛りをくなり餘り急過ぎても緩過ぎても惡るい其爲めに焮衝を起すことがあり升又之を淸潔にしませんと病の種となり升御承知の通り日數を經れば天然に落ます落ちた跡がたゞれることがあるから注意して布にて覆ひ毎日能く洗ひ淸めなければならん落たては軟かですから泣かイキムかすれば出臍となるか左なきは腸を出し又糞を出し遂には死ぬと云ふ樣になるから餘程注意に注意を加へないとなりません。

次には頭のことです御承知の通り七日の晚には七夜とか申して髮の毛を剃るが是迄の風習でありますが近頃は廢めた人もありませうが隨分まだ遣ります是れは髮の毛の黑きを望むので女などは毛は是非に黑くなければならん近來束髮なんどが流行るから赤い毛がいゝかは知れぬが矢張黑い方がいゝと云ふ人が多いから度々剃りたがる人がありましやう併し日を經剃ても矢張同じき効能があるから慌てゝするにも及びません頭に腫物などのするは天然にして置た子には少ない少しにても傷がつくと夫が元で直に腫物となります胎毒などと世人は申しますが多くは是れから出來る樣に思ひますから九ケ月日ぐらゐ迄は剃らぬ方がよろしいです。（未完）

周南召南を讀て聖世道德の盛んなるに感じ鄭衛の詩を讀ては其國の淫奔亂風なるに驚く

○瓜や茄子の花盛り

風船に乗つて下界を見下せば、實にさまぐの面白さ哉。われ閑窓に書を開らき、古人と談論して幽玄の理を窮むれば、永遠の太古より永遠の將來に至り、無限の天上より無限の地下に達す、一意悠々、斷えて局促せず。則ち、仰臥して新聞紙一葉を見る、啞然として歌ふて云く、

高い山から谷底見れば、瓜や茄子の花盛り。

○正念坊の一枚起請

都近き岩はなと云ふ所ろに昔し正念坊と云へる庵主の念佛堂あり嘗て左の一枚起請を書き殘して忽焉として死しぬ、

もろこし我朝のもろ〳〵の智者達の致し申さるゝ隱遁の隱にもあらず又學問して道の心を悟りていたす隱遁にもあらず只不用の者の爲には世の妨となるまじとさへ心得れば疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりて隱居するより外か別の仔細は候はず但し肝心の世わたりと申すとの候へども皆な衣食住のうちにこもり候なり此外に欲深きとの存せば諸人のあはれみにもはづれ候べし假令ひ瓜をかぶり糟糠を嘗め人の軒端に臥せるとも食ひては寢食ひては遊ぶ君が世の難有さを忘れば身は安樂にありたりとも生たるかひもあるまじく候あなかしこ

辭世

來て見ても來て見ても皆同じと
こゝらで一寸つと死んで見よふか。

評に云く。上帝を信ぜず正義の實在を信ぜずんば高尚脫俗の人大率ね皆な斯のごとくなるべし。吾人ゆへに論ず信神の人是れ第一、禪識の僧是れ第二、餘は滔々たる俗物也。

昔し孔子榮啓期を見て問ふて曰く先生何をか樂む啓期答ふるに三樂を以てす一に云く男女の別男尊くして女卑し吾すでに男たるを得る此れ樂みなりと孔子曰く能乎自寬すと孔子も亦たイヤナ人なる哉。

○「愛と名譽」のうた

米國バルチモーア、アメリカンの寄書家たるクラウフホルド、ドルセー孃は當時ジヨンス、ホプキンス、大學に留學せらるゝ社友元良勇二郞君に依りて「愛と名譽」の英詩一篇を寄せらる言想純雅之を唱へて感味尤も深し則ち忍が拙譯を副えて左に揭出し讀者、ことに妙齡多恨の少孃諸君、が一讀を煩わす。

LOVE OR FAME.

By Miss Hester Crawford Dorsey.

(1) *Love came one day with downcast eyes*
And said to a maiden fair
Who stood before the brink of life
Her destiny to dare —
"O maiden! in the blush of youth,
Thy heart I fain would win,
Before thou learnest in the world
Ambition's blinding sin."

(2) *Then, Fame, with radiant, upraised eyes*
Stood by the maiden dear,
And said: "O! listen not to Love:
Fame's is the voice to hear.
If thou wilt mount on poets' wing,
Forgetting Love—such a fragile thing —
Thou shalt win the praise of the madding throng
At every burst of melodius song.

(3) *"For Love is the worship of but one man*
While Fame is the adulation
Of all other men and maidens, too,—
The spontaneous praise of a nation.
Then turn from Love, although't will break
Thy tender, new-founded heart,
And from the fount of inward grief
The poet soul will start;
For hearts must break at poets' birth,
Their font must be a grave,
And the tears the holy water pure
In which their spirits Lave."

(4) *Fame won—and from Love's bier*
A broken heart was lifted—
And from that heart, unto the world,
Sweet plaintive songs have drifted.
And all the burden of these songs
Has been and will be ever,
Choose Love—it is the best of life;
Flee Fame and grief together.

愛と名譽

月の舎　しのぶ　譯

(一)うきよのきしに、たゝずみて。ふみいでんとぞ、さだめたる。
可憐のおとめに、ちかづきて、愛はしづかに、まをすなり。
「若きさかりの、わが妹子よ。こゝろをくらむ、いたづらの。
はかなきつみを、知りそめぬ、きみがおもひの、したわしき」。

(二)ときに名譽は、ちからたち。まあざしすごく、いさめける。
「愛のすゝめを、きくなかれ。たゞわがこえを、きけよかし。
もしいたづらの、愛すてゝ、うたよむひとと、おりもせば。
吟んじいでなん、ふしごとに。くるへるほどの、ほまれ有ん。」

(三)愛はひとりの、おがめなり。名譽はたほき、をとこめの。
たふたみうけて、一つ國の。たみみな自然に、たゝゆべし。
優さしきむねは、くだくとも。愛をばすてゝ、かえり來よ。
うたよむひとは、心中の。くるしき地より、いでゝ來ん。
抑もうたよみの、しゆつ生は。こゝろのさけぬ、ゆうべなれ。
墓墳を名つけの、みづとして。なんだに精靈を、洗ふぞよ」。

(四)名譽は勝てり、愛は死す。そのひつぎより、うまれ來し。
くだけしこゝろ、うちなきて。うたを浮き世に、たゞよわす。
われろのこえを、きゝぬれば。たえず哀われに、うたふなり。
「愛はこのよの、たからなれ。去れよ名譽は、くるしみと」。

○百人一首一口話（其六）

鈴木弘恭閲
八木朋二録

安倍仲麿

天の原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月鴨。

此の歌は。萬葉集にも古今集にものせたり。仲麿が明州にてよめる歌にて。青海原ふりさけみれば。とあるを。此所は天の原と改めし也○天の原とは。大空のこと也。はらはひらと同じことにて場所の廣き所をはらともひらとも云ふなり。即ち廣き空を天のはらといひ。廣き海を海ばらといひ。廣き野を野はらといひ。廣き田を田はらといひ。川の廣きを川はらといひ。篠のありて廣き所を篠はらといひ。草の茂りて廣き所を草はらといひ。松の生じて廣き所を松はらといふ。初學のもの松ばらとは松の疎々あるゆゑなりと思ふは。大まちがいであります。人躰のうちにても一ばん廣き所をはら（腹）といひ手足の廣き所を手のひら足のひらてふも同じことであります○ふりさけは。ふりさからせにて。ふりを添ていふ言也。添詞は言をつよめていふ時などに用ゐる例也。さからせは放也。遠望する時には仰向てみるもの也。これを振放て見るといふ。物を放して見ること○かすがは。大和國の春日なり○なるはニアルを約てナルといふので春日にある三笠山といふ義なり○かものもは咏嘆辭といひて意なし。俗に感心したときにオヤマアなどいふマアといふ義なり○一首の意は。大空を仰き見れば。あの月は我が故郷の春日にある三笠山にいでた月影のやうであるがマア。どうもなつかしい月影であるよ。と故郷を思ふ情をのべたり。唐詩にも擧首望山月抵頭憶故郷といふがありますが。此の歌は故郷を思ふといはずして。其の情が言外にあらはれてゐるから。彼の唐詩よりも遥かにまさりてゐるやうです。すべて歌にても詩にても哀しいといはずして悲しく聞え。樂しいといはずして樂しく聞ゆるのが。名人佳作のしるしであります。語格は一段切れの歌にて指辭なし。故に月かもといふかもは徒の結びであります。

○戒指考（其二）

久松定弘

基督教の新禱文には戒指は婚姻契約をなしたる新婦の左手の第四の指に嵌するものなりと云へりされども新禱文のいまだ世に傳播せざる頃はこれを新婦の指にはむるには先づ「神父の名義にて」といひてこれを巨指に嵌め又「神子の名義にて」とてこれを食指にはめ「聖靈の名義にて」とてこれを將指にはめ最後に「亞孟」と唱て第四指（即無名指）に嵌るを例とせり。

東洋の「オルトドックス」敎の儀式にては戒指は左手にはめて三たびこれを更換するを例とす此例によれば新郎は先戒指をとりてこれを新婦の指にはめ次に僧侶は新郎の戒指をとりてこれを新婦の左掌に置最後に新郎は僧侶と倶に來りてこれを無名指にはむるなり惟ふに此式は三位合體とて神父。神子。聖靈相合すとの敎說に基きたるものならん。

魯國の傳說によれば同國にては萬の事三をもつて神聖の數となせりこれ亦三位合體の說を迷信するによるあるべし今その二三の例をあぐれば父たる者はかならず三子を有し決して是より增すことなく又減ずることあるべしと又武將たるもの他領を侵略したるときは三回其領地を巡廻すべしと又魯國にて驍勇無雙と稱せらるゝ武士は年紀三十ありと又事業を企るにもこれを試る三回ならざれば其志を達す可らずといへり。

今世の希臘人は婚姻契約の際二種の戒指を交換す而して其一は金製にして其一は銀製なり今其儀式如何といふに大略左の如し。

僧侶は敎會堂の中央におひて聖書を以て飾れる場所に席を占め此所にて火を點じたる燭を新郎新婦に與へ夫より席を下りて新郎新婦の傍に至る其時傍の人戒指をとりて之を僧侶にわたす此戒指はあらかじめ祭壇の上におきて祈禱をなせしものありと云ふ又僧侶は戒指にむかひて再び祈禱をなし其金環はこれを新郎に與へその銀環はこれを新婦に交付し「上帝の僕何某上帝の婢何某、神父神子及聖靈の名を以て現時將來及永遠に夫婦の契約を爲す亞孟」と三たび唱ふるを例とせり。

又アルメニア國にては三歲未滿の幼童幼女夫婦の契約をなす事ありその契約の式いかにといふに夫となるべき者と婦となるべき者の雙方の母親合意一致して其子女を夫妻となさんとせば母親は其旨を父親に告げて協議す、父親は母親の選たる子夫には通例異議を容れず而して幼童の母親は年老たる二名の婦人と一名の僧侶を伴ひて女子の兩親の許にゆきて將來夫となるべき幼童の名義にて女兒に戒指を贈る此式終りて幼童を室內に入僧侶は聖書中の一節を朗讀して新郎新婦ゆくすゑの幸福を祈禱すこれよりのち幼童は婚姻の期にいたる迄每年一回新婦のために一領の衣服を新調してこれを贈與するを例とす歐羅巴にてもこれに似たることあり就中王侯貴紳の中には幼稚にて許字したるもの多かり例へば英王顯理第八の娘馬理公主が佛王フランツ第一の皇子と婚姻を契約せし如き是なり此婚姻契約の式に公子の代理となりたるは倫頓駐在の佛國

公使ボンニヴェー氏なりきこの儀式ハグリーンウ井チに於て執行せられしが頗る盛大を極め一時世人の耳目を驚かせしと云ふこれ一千五百十八年十月五日の事にて皇子ハ生れてより僅に八月公主ハ齢二年ありき其式場の光景如何といふに國王ハ玉座の上に坐しその傍に皇后及英國の馬理公主坐を占めたり又佛國の皇子ハ金線寶玉をもて飾れる衣服を着して馬理公主の前に坐し其傍えは羅馬敎皇の使節ウオルゼーカムペギオンの二氏着席す斯くて僧正トンスタール氏ハ一場の演説をなし演説畢りて後僧正ハ公主を抱き國王及女王の前に出で其許可を乞ふ登時ウォルゼーはいと小さき戒指を取きたりて公主の傍に立てり此戒指は特に公主のために造りたるものにて金剛石を欲めたるものありしと云ふボンニヴェーは皇子の代理となり件の戒指を公主の指にはめて祈禱をなせり右の式畢てウオルゼーは英王及宮廷の諸官吏と侶に讃美歌を唱へ聖餐式を執行せりとぞ。(未完)

小説

○都島　第四回

石橋忍月

右引つゞき相掲ぐべきの處ろ忍月儀此頃病中にて筆を執りがたく止を得ず本號には相載せ不申候。

尙ほ遠からざる内に「新粧の佳人」著者須藤南翠子の新作小説御覽に入るべく預じめ風聽申置候。

○小説神髓

蘇格氏著ケチルヲルス　(第十三回)

扨て小間物賣に身をやつしたるエーランドは間道を通りてラブサートの隱れ家に至り密かに内を窺ふて靜かに案内すれば慾には扱目なげの老婆一人出で來り「お前は何ちや」と云ふ私は小間物賣何か御用を仰せ附られてと云ふを鷹揚に構へて鼻で遇らい此のお邸には其樣なものは入らぬと既に早や立まくする袂を引止めて少し計りの金を入るれば皺顏頓かに笑ひ莞爾として仰せあるよう夫では彼處の庭に御遊歩あり直樣通つて御用を承ハり候へと云ふ黄金の効驗いやちこにて難なく第一門を通りたり。

樹陰靑く水淸き宏大なる園庭は夫人を慰さめんとてレスター侯が心を凝めて造り爲したるものなりラブサートは恨思無聊にして空しく都の天を望みたゞ折々の逍遥遊を切てもの樂しみとして今も亦た婢をせず一人を後ろにし覺束なくも小天地内に徘徊せり。小間物屋恐る〳〵近づき何物か御用を仰せ附

られてと云ふにゼチは早くも之を遠ざけんとするを夫人は反つて與ふるとに思召し是又鬱を散ずるの便よりならんとて近ふ招きて種々の品を求めたり。エーランド如何にして其志を申し出さんかと考へたるが遂に

此頃はケチルチルス城の御饗應御仕度にて何も箇も莫大の購貫、近くに上(皇后)に御目出度事のありとて都中にての大評判

ゼチは夫人の御前と思ひ「コレ／＼商人何を申す」と制すれ共遂に此の一事を冒頭にして段々に話しを仕掛け扨て傍はらの箱に納れ置く小さき錫の器を特更に見するようにして早や荷を片付に掛れば夫人は目ざとく彼の錫の器を見て夫は何ものぞと問はるゝに是は氣の鬱し易き人々に効能ある靈藥にて當時専ら御贔負を蒙むり候ものなりすでに先達てもトレッセリアンと申す紳士にも之をお買求めにあり僅かに服用遊ばされて直様お氣分が勝れました由と云ふに夫人は最と思はし氣に

左様か、トレッセリアン殿の御氣鬱が直りましたとナ

と偶と述懐しつゝ己れと之を制し此の藥をも少々求めさして數多の品を抱へ奥に入らる。後にはエーランド密かにゼチに近づき忠義相なお召遣ひと見て君が御主人の事につき申し置き度事ありと云ふに、最早や品物さへ賣りたらば何も用はあるべきにと不思議がるをエーランド側ほも近寄りて何やらんヒソ／＼と忠告し居たり。

時にフホスター、アラスコ、マイク、の三人ぞや／＼と歸り來る中にもマイクは例の大酩酊にて連りに惡口雜言し側ほも酒をもて酒を持てと喧ましくわめき立てたりアラスコ餘りに見兼ねて夫れでは己れが酒を遣らうと立ちに掛るを「どうして／＼お前の酒などは何を飲まさるゝか知れやしない」と云ふ此の一言先づゼチに恐怖心を起させたる少からぬにマイクが側ほも暴言して「今にレスター侯が上みの御手を載きパーチーが宰相に成つたる曉つきは此のマイクも一國の領主位ひには爲れる其時にはあの夫人にも酌位ひは取らせる」など最早差し許しがたきおシヤベりを爲すにぞアラスコ急に藥を調合し之をコップに盛りて其手に持たすればマイク之を酒と思ひてグット飲み干すとき早くも死人の如く熟醉したりゼチは之を見ていよ／＼恐氣立ち先刻の小間物賣の忠告果して當れり油斷あらずと用心したり。

話頭一轉してケチルチルス城の御殿と爲るパーチーはレスター侯に白すようお上みの御催促しきりにして最早や多くの時

日を猶豫いたすとも成り申さじ只だラブサート殿を當日の宴席に招き參らするとよ付て今まに良き御工夫を得ず夫が爲め斯く追々の延引を願ひ奉れど早や此上とは申し出られまじ殿には何か御思案の候かと云へばレスター切りに困じ果て日々夜々之を思ひ煩らへども名策なし矢張之を汝ぢの方寸に問ふの外案を得ずとあるにパーチーの答ふるよう愚考を運らし候にたゞ一つの策あり即わち恐れ多けれども暫時某の妻と名乘りて御出席あるの外致方之れ無く候半と云ふに候は彌よ困却し夫人は志氣高尙にして毫も屈することを好まねば中々に之を受引申さじとなれど左らばとて色々に工夫する二三の方法も皆な其の無効なることの明白なれば遂にパーチーの策を用ゆることに決しぬ。然らば之より早々よ申行かん御自筆の書狀に印を捺したるを戴きたしとて怯わつるが如くに之を請ひ受け又もや其心の變わらざる内にと馬に鞭うちカムナプレスに馳せ向ふ心の中ぞ恐ろしき。

佳傳

○ジヨウジ、エリオット女史小傳　平野はま子

人若し十八世紀の下半代に彼の大英國に產れ出て稀世の博識を以て絶大の才筆を振ひ新躰の小説を創始し古今文壇の諸勇將を風靡したる夫のサー、ウオーター、スコットより以來今日に至るまで滿腔の精神を文筆の上に注射し人情世態の隱微を穿つことを務めたる無數の文人記者に就て永く文學世界に獨歩すべき者三人を擧げよと云ハゞ吾人ハ必ず先づ指をザカレー。ヂッケンス。ジヨウジ、エリオットの三子に屈せざるを得ず實に此三子ハ永く英國文學の史上に特筆大書すべき三大小説家なり左れば今玆にジヨウジ、エリオット女史の小傳を説き出し婦女子亦た大に爲す有るに足ることを示さん。

女史ハ實名をメレ、アンヂ、イーヴアント云ひしが如何なる故にや自らの名を世に公にするを好まず常に其著書に識るすにジヨウジ、エリオットの名を以てせしハ世人の普く知る所なり偖説く此ジヨウジ、エリオットハ一千八百二十年ウオリックシヤイアにてナンニエトンとなん呼び做せる所に程遠からぬグリップハウスに生る父ハロバート、イーヴアンとて此地の地頭たり職ハ幼にして學に志し尤も高等の敎育を受齡未だ三十に達せずして獨乙人ストラウス氏の著書レペンセレウ(基督一代記)を譯して二十磅の報を得たり是ぞ實に孃が英國文壇の戰場に立顯れたる初陣とこそは知れたり後一千八百

五十一年ウェストミンスタ雜誌の記者ジョン、チャンプマンを補助せんが爲め英京ロンドンに居を轉じ彼處に留まると七八年其間之が投書家とありて大に記者を助けたり斯くて漸くに孃が名の世上に顯はるゝや直に交を孃に乞ふの紳士少なからざる中にも當時著述家及び哲學家を以て名を博したるジョウジ、ヘンレ、リース氏の如きは屢ば孃と文を往復する中互に語氣の相投じけん遂に偕老の契を結ぶに至れり一千八百五十七年女史は初めてブラックウード雜誌に僧侶の近狀(セ、シーンス、チフ、クラリカル、ライフ)と題する小說を揭げしが此頃は未だ其の名今の如く廣まらざりし先なれば從て之に意を注ぐ者も亦稀ありしに獨りヂッケンス氏のみ號を重ねて出版する當小說の結構の斬新なると文章の鮮明あるを見て其凡人の作に非ざるとを認めしが果して千八百五十九年夫人が「アダム、ビード」と名づくる一書を公にせしより其名は英國全土に轟き遂に文壇上第一等の地位を占むるに至りしかば流石は文學の蘊奧を究めたるヂッケンスの鑑定こそ鋭けれと時の人皆感嘆し措かざりしとぞ斯くて女史は「ミル、アン、ダ、フロース」「サイ、ラスモイナ」及び他に數書を著はし後一千八百八十年の春の頃(先に其の永遠の佳友と定めたるジョウジ、ヘンレ、リースの死後を云ふ)に至り之とアイ、ダブリユー、クロッス氏との間に冬籠りせし戀愛の花は今を春邊と咲初て遂には握手結婚の大禮を行ふに至らしめぬ兩人の愛情は日と共に濃かに時と共に暖かにして最と幸にぞ見しかば

人皆此和樂の芳園よりは如何なる果實をや得やらんとて待ちにし甲斐も情なや月下叢雲あり花發風なきを得す滿れば欠くる世の習ひとて千歳をかけて契りたる結交は僅に七ヶ月にして女史は先づ吹き下す木枯の散す落葉と共に六十年を一期として果敢なくも玉の緒を斷ちたるは即ち同じ年臘月二十二日のことなりき。

茲に女史の性質に付てはその知己たる友人がセンチユーリー雜誌に投じたる傳紀中の言を引きて之を說かん曰く女史の風情は自然にその志の趣く處を顯はし固より人を悩殺するの艶美なく或は婀娜たる風前の柳姿なくして身躰肥大に顔ばせは皺波を催ほしたれども品位賤しからず其風采の欽慕すべき一見人を化するの色ありて其著しく容顔の美麗ならざるとは却て女史の天性が放つ光輝に光澤を添すの基となりたり殊に女史が繊々たる手を拱て深く物を案ずる樣或は人に語らんとし又は物を聞かんとして躰を屈するの姿或は莞然として談ふる者の如くに眺むる涼しき眼元等は女史の非凡の才ありて而も自負の心なき快濶果斷の精神を宛も面に畫き出せるが如し然れども猶は著しきは女史の音聲こそ實に其音たる銀としと雖も賤からず高からずと雖も足り其朱唇一轉して玉音を弄するときは黄鳥の梭を飛ばすに非ざれども其聲を聞くものをして言語を以て言ひ盡し難きの感情を懐かしむる殊に妙なり或は斷金の友人と親しく其肺肝を吐露する際女史の胸に浮び來る感情のやる方なさに思はずも頭を擡げて佇立し或は慷慨の餘り空に向て仰ぎ見る其容顔は高尚潔白にして美麗ならざるも何となく潤澤ありて一度之を見し者をして復た忘るゝこと能はざらしむ眞に女史の如きは匹ひ稀なる女丈夫とこそ謂つ可けれど。（完未）

寄書

少女子たちにしめすとて　飯村の隆棟か讀る

天地のおのつからなる理と繼身の世にありとありいきとし生る物とてハ獨はあらぬものそかしましてぬ藍にぬき出てゝ長とたちへて眞髮ふるくしきみ魂をかしこくも神のみことゆ賜たりし人にしあれは己かしゝ身のほと〳〵の功をハもとつこゝろの楷柱たてすゑましをなかなかに佐しなくハ海原を舵なき舟の渡るごと眞帆なき舟のわたるごと蘆きのみかハ波風に行逢もしらず漂はん男ハ舵よ女は眞帆よ作ひたすけ海原もなく越はなへ末つひに豫の國につきぬべしあらまほしきハ眞佐行らまほしきはよきたぐひたぐへてハはゝ飛鳥のふたつの翅左をや折りてそこねんみぎりをや截りてすてなん尋ねなハ得こそは飛ぬきりすては得こそ翔らめさらばさハ男女は雛のみの獨ハあらて玉椿二人たちそふ常なれや自つからなる友なれや何れをわきて落しめんかゝる理しろしめし遠つ御門の御代〳〵ハ男女のけぢめなく文の林にわけ入りて詞の花を手折りもて四方を匂はしあるハ又位の山に登りたち月の桂を插頭してハ今のうつゝに見るはかりしかは有れとも三栗の中つ世頃は五月雨のやとの亂れよいかにせん學ひのみちの道長きゆく手の橋の中たえて繼なん人もなきまゝに朽ちはてんこそうたてけれいつしか秋と晴間まつ雲井をもるゝ涼風のそよ吹く舘葉賤くてふ新田の位の大御言をうけたまへりて國々をまつりごちてそ物まなふ道の八衢またさらに野中の清水たのふかき心をくむ人もありとへすれと[illegible]獄の亂れし世ゝの習はしに馴て時ロし常磐木のしみらに生ふる男

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

山さくかひもなき女郎花霜になやめる哀れさもたゞ白雪のふる年の夢とさめてうらうらと心もはるの花柳八重九重のみやこよりものうかる音に鶯のなくなる里のくまもなく至りとほらん此の世にひとたる人は友といひ死と言たてあるものを小草における露なしてあだあだしくも交らふは自つからなる理にけふの細布むね合はぬ業なりけらし片糸をあは緒によらぬ業なりと遊ひたへるゞうなおすら心のさとり明りゆく御代の惠のいちじるくためしはさはに此處彼處たちし文居にたらちねの親のみ許しかゝふりて來よりつとひて睦しく學ひのみちの兄弟と志をも語らひて唐の大和のうれならぬ耳たに目たに新しき講のしをりのふしぶしを八尾の椿つはらかに讀みかう閑へつ撓みなく勵み競ひて年月をかさねがさねて夜光る玉とみかきしれちへしも學ひの窓のかね言に違はす耻ちす紫のゆかりを尋ね眞友を撰ひともなひ眞友の功を佐け世の人に數まへられてけりかうへにわくごをゝしへ父さとし脏子を諭し母をしへ富士の高根のたからかに家の風をも吹起し民のつとめと國のため我大君のしきませる執るやをゝしき精戈千足るの御威稜あまつ日の大御印の勢とふたつながらにとこしへに照り耀かせあなめぐし宮毘をとめようるはしの女よ。

これは西洋を經と支那を緯として新たにおりいたせるものなれは世のつねの大和錦とは異になんありける見ん少女子たち其心してよ。

●新報

(此欄内に限り自由に轉載するを許す)

○賦金の運命

賦金と申し遊廓よりの上り金は莫大なる所ろ之が使ひ途は公けに明示されず從來種々の行違ひも有之やに聞ねたるが此度いよいよ此を全廢し地方税中に娼妓税等と云へる税目を新設せらるゝやに承はる。吾人之を朝野新聞に聞く云く本來全國にて年々賦金の徵收惣額は七十四萬圓と稱し内三十三萬六千圓を國庫に納れて高等警察費國事探偵費梅毒檢查費等に支辨し殘金四十一萬圓は各府縣長官に放任しあるよし傳ふれども實際の收入額は百二十萬圓に上れりと告ぐる者あり現に東京府にて一箇年の收入額六萬圓と稱するにも拘はらず本年三月中に一萬一千圓の收入ありし趣なれは此の比例を以て推すに一ヶ年に十三萬二千圓を得べき割合なり云々。嗚呼暗黑の人之を暗黑塲裏に放擲し去つて而して之より上る所ろの税金亦た暗黑の中に用ひ去らる而して其元因を推すに皆是れ老父老母が辛酸艱苦の間だに蓄積したる資金にあらざるは尠なし。

○美術取調

九鬼圖書頭濱尾專門學務局長岡倉美術學校幹事及米人フェノロサ氏等は古書畫珍器取調として京都大坂奈良滋賀和歌山二府三縣下へ巡廻の爲め去る五日出發したり。

○美術學校新築

美術學校新設の位置に就ては屢協議ありたる樣なりしが今度愈ゝ上野教育博物館の後なる文部省用地に新築することに決せしも本校の建築は容易ならざるを以て先つ差向き假校を建設することとし既に地ならし等に着手したりと云ふ。

○美術展覽會

同會は來る卅一日にて閉會すると云ふ又明十三日午前十時より新製品褒賞授與式を執行する由。

○女子職業學校の出品

同校生徒の手製品を巴里萬國博覽會へ出品する趣は曾て記せしが製造中の物品は刺繡五品圖畫三十品造花四十品にて何れも日本固有の花鳥を繪き製造するものなりと云ふ。

○分娩院

今度本郷區曙町七番地へ分娩院と云へるを設立し姙婦を入るゝ室八十餘ありと云ふ。

○音樂生徒募集

東京音樂學校にては來九月男生徒と共に女生徒十五名試驗の上入學を許し志願の者は六月三十日までに履歷書を添へて同校へ出頭すべき旨廣告されたり年齡は滿十四年以上二十年以下にして試驗科目は左の如し。

體格	身體の健康	作文	書翰文、假名交り文
音樂	發音及聽音	算術	四則、比例
讀書	國史略、外史の類講讀	英語	綴字、讀法、文法

○鳳鳴會

同會は去六日午後一時より星ヶ岡茶寮にて催ふされ棚橋絢子水野峯子宇川盛三郎鈴木萬次郎諸氏の講演ありし由。

○京濱婦人聯合大祈禱會

京濱にある基督敎諸會の婦人は去月廿八日橫濱薩摩町百六十六番館海岸敎會々堂に於て執行せられたり同日は稀なる好天氣にて來會者も極めて多く午前九時の開會に先ち數百名の來會者あり午前は二ノ宮おわか姉午後は橫濱共立女學校々長ピヤソン姉の司會にて各信仰と云へる宿題に就いて演說せられ又各姉妹の熱心なる祈禱と有益なる感話は打寄する漣の如く跡よりぞく引續き春の永き日も此日は短かき心地せらるゝ程なりしと此日來會せられたる婦人は啻に京濱のみならず近縣の敎會よりも臨席せられたるの惣員は五百餘名にて近來稀なる盛會なりしと云ふ諸姉の感話奬勵中金玉の言葉極めて多きとならんが弟は其席にあらざれば悉く之を報ずる能はざるは遺憾なり。(稻垣氏報)

○若松婦人矯風會

福島縣若松は近頃基督敎隆盛に赴きられに隨つて婦人は一段の進步を顯し去月廿七日に結會になりて會員三十名程なれとも信者のみならず未信徒の人も近ゝ入會の申込多しと當時會員の勵きは禁酒の事に盡力せられ會頭に山岡はる子書記に海老名さと子八島ふじ子の兩氏當撰なりたりといふ。

○金澤婦人慈善會

加州金澤營所在勤陸軍高等官の夫人には題號の如き會を設け是迄毎月日曜を期して大手町陸軍將校集會所に集會を開きしが今度更に規則を改正し會務を擴張して去月二十日集會を開きたり同日會せし夫人令孃は五拾餘名にして先づ小野軍醫正は同會の規則を解說し次て岡本少將は赤十字社の起因幷現今歐米各國幷我國赤十字社の景況等を演述し次に小町軍醫正幷其他の軍醫は繃帶の用法等を教示し閉會したるよし。

○同文社

仙臺の同文社は女子教育の目的にて原田勇美氏の設立せられしものにて理化經濟修身等の學科を授け來りしも追ゝ生徒增加せしより更に數學和文漢籍其他普通の諸學科を增設し一層高等なる教育を授けんとて既に教師を雇入れられ

(三二三)

たる由。

〇岩手婦人會　岩手縣盛岡有志の婦人は今度同地に岩手婦人會なるものを設立し去る一日同所东清閣に於て開會式を行ひたる由なるが右は同志の婦人互に修身衞生育兒の法より家事經濟飲食物調理方等に至るまで婦人に必要なる事柄を研究するの主意にて入會する婦人は十七歲以上にして現に在學せざるものに限る由又毎月第二第四の土曜日に常會を開くと。

●海外女報

〇女子印刷所長　米國ニウィングランド女子印刷所長ホワイト夫人は女子新聞記者卒先者の尤も熱心なる人なるが右印刷所は同夫人の勞力により日に盛大に趣くとぞ。

〇バウン孃演說　有名なるバージニア、バーン孃は久しく歐洲を漫遊せられたるが此頃ろ郷晢に歸り傚育學校に於て古今の詩歌と云へる題にて演說あり其の題目は左の如くなりしとぞ。

（一）自然と批評　（二）東洋の詩歌
（三）希臘の詩　（四）バージル及ダンテ　（五）シエクスピア及ダントン
（六）バイロン及ノヅノルス　（七）シエー及キーツ
（八）バーレット及ブロニング　（九）テニソン及スウインバーン
（十）エマソン及ロングフヘロ　（十一）米國の新詩人

〇大學學位　英國カムノリッヂにて女子に學位を授くるの可否の論題は本誌第九十九號にも掲載したるが當今いよ〳〵盛んに議論あれども未だ一定するに至らず。

〇子供のはなし

小學校先生のお話（すこい仕立屋第二）

就ては從兵を與へんとて數十騎の騎兵は仕立屋の後につき山奥深く入りました　愈彼强盜の捿むと云ふ林に入りますと仕立屋は騎兵に命じて其所に待ち居らしめまして自身は陰かに數個の石を拾ひ持ちまして强盜の住家さして行きました遙か向ふの大木の影に大なる男二人鼾寢して居る能く〳〵見れば彼の强盜なり幸ある事と急ぎ其木に上り一つ〳〵石を下に寢て居る强盜の胸の上へ落しました始の程は少しも知らず寢て居りましたが度々打たるゝものですからこれは必ず同類の我を打に違なしと思ひ目を醒し見れば又左に寢て居し强盜も同じく目を醒して立腹して居るこれも最前から上より落ちし石を同じく同類の自身を打ちしと思ひましたものからでありました然るに右の盜は左の盜が打ちしと云ひ左は右が打ちしと云ひ遂に喧嘩を始めました何れも負けず劣らぬ强者なれば最と劇しく打ち合ひましたが遂に雙方共に疲れて其所に仆れました其時仕立屋は木より下り劍を抜き二人の首を斬り最と鼻高く騎兵の前に持ち來りまして共に國王の前に持ち行きました王は驚き迚も生きて歸るまじと思ひしに敵の首を携へて歸りし事なれば愈仕立屋を恐れ其娘を與へ王國を半分せば忽ち我が王國をも取るならんと心配して又申しますには後の山の林の奥に何とも知れぬ獸あり頭に尖き角を持ち田畑を害し人畜を害ふ夥しく爾もしこれを打ち留めば豫て約束の褒美を與へんと仕立屋はこれ最と安き事なりと獵人に導かれ山深く入りますと向ふより件の獸は喘ぎつゝ走り來る獵人は恐れて其塲に佇る時に仕立屋は獵人に命じて其所に待たしめ獨り進み行きまして大樹の前に立ち來る獸を待ちました獸は矢の如く只其的を見て走り來ます間近く來りてアハヤ一撃の下に仆れんと

する時仕立屋は身を反へして其樹の後へ隠れましたそれを知りながらも餘り走る勢の強きゆへ急に其方向を變ずることは出來ませず思へず其木に角を深く刺しましたされば獸は木に繋がれた樣にありまして少しも動く事は出來ませぬ其時仕立屋は其獸を殺し獵人と共に其獸を王の前に運びまして其功を申し上げ且つ此の獸は角馬と申す最と猛き獸なることをも聞へ上げました國王は愈恐れ又申しますには茲所より凡そ三十里の山奥に一の寺院あり常に怪の化物出で屍を食ひ人を惱ますとて今は其寺院も人なき空き屋なりと云ふ爾もしこれを平げなば其時こそ豫て約束の品を與へんと仕立屋は化物の世界に在るべき筈はなし由しや眞に化物ありとも如何程の怪力を持つとも一撃ち七頭を仆す拙者には能も敵せまじと申しながら彼の寺院に入り込みました。（未完）

○印度物語

此の印度物語は當時札幌に居らるゝ大島千代子の眞人正健ぬしがその御息子の爲に譯されしを他の小供をも喜ばせんとて同子より送りこされたれば茲に掲げぬ。

第一、痴人と熱病

或る人熱病を煩らひいたく悶え苦るしめる折フト傍の爐にありける燒火箸をとりて水の中に入れ其忩ちさめたるを見て頻りに點頭き忙はしく鈴をならして召使を呼び水を汲ませて其中に入り身を冷しゝに病却つて愈重りければ醫者を迎へて診斷を乞ひしに醫者はあきれて馬鹿は眞似にて身を亡ぼすと云へり。

萬國女子大會景况錄

本年三月廿四日以降米國ワシントン府内リッグスハウスにて執行せる世界萬國の女子大會（インターナショナル、カンシル、ヲフ、ウイメン）の景况は讀者が尤も聞たく思ひ吾人が尤も報道したく希ふ所ろのものなるが此頃に至り追々其景况錄を得たれば即ち左に續々揭出すべし

三月廿四日大會の前集會として各國の委員達の顔合せあり即ち當土曜日午後よりリッグスハウスに集られたる人々は凡そ四十名にして皆それ〴〵に代表せらるゝ所ろあり、

先づ米國以外の國々よりは

蘇格蘭エヂンボロ女子投票權公會よりとして　並にスカッチヤード夫人
チヤント夫人
英倫土ダーリントン女子自由協會並に同ヨークシア及びサウスチーク女子
自由協會よりとして　スカッチヤード夫人
墺太利亞ニウカッスル女子自由協會よりとして
ヂルク夫人
大英國禁酒公會よりとして　ガスタフリン夫人
緬甸婦人會並に　少女保護婦人會よりとして
フレデリクセン夫人
那威女子投票權會よりとして　グロート夫人
魯士亞フヒンランド女子協會よりとして
男爵グリッペンバーグ夫人
セントラゼール四人救助會よりとして
ベージロット夫人

扨又米國以內の州々よりは

女子雜抄會よりとして	ホウエ夫人　及エストマン孃
萬國女子印刷會よりとして	マルタフロールド夫人
米國女子印刷會よりとして	ハドレーモール
德育會よりとして	フレーゼル
米國自由浸禮會よりとして	ホール夫人
基督教婦人傳道局よりとして	ユア夫人及ノールス夫人
西部女子ユニテリアン協會よりとして	リチヤードソン
女子補助ユニテリアン協會よりとして	パルロース夫人
女子大學百年紀念會よりとして	ヂーン夫人外一人
米國女子投票權會よりとして	ルシーストーン。幷びに
	リバーモア。ブラツクエル。諸女史
米國婦人禁酒會よりとして	ウイルラルド孃、ホフマン孃
萬國婦人禁酒會よりとして	スミス女史
トロント婦人禁酒會よりとして	カイフヘル女史外一人
女子救助會よりとして	リチヤード女史
少娘相互改頁協會よりとして	スネル女史
女子救助隊よりとして	クラ、パートン女史
勞働者救護軍よりとして	パーリー女史
女子教育及職業協會よりとして	ヂアズ女史
婦人小兒病院よりとして	チエネー夫人
禁酒病院醫學校協會よりとして	博士パーネフト女史
女子宣教師會よりとして	教師ポールス女史

大抵右の如くなれども尚此外に畧したるもの少からず

○

扨て衆議員の匪定まるときアンソニー孃假りに議長の席に就て事務整理の爲め準備會議を開かれたる所ろシフール夫人の發議により右萬國女子大會なるものを永續し向后幾久しく之を維持せんとあるに先づウイルラルド孃イーストマン孃或はポールス、スミスの兩夫人の如きは何れも皆熱心に之を賛成ありたれども他に種々の反對論もありて一と先づ之を後日の再議に委するとと爲り假に委員十五名を舉げて其の議案を制するとに定められたり。

○

此夜即ち土曜日夜は九時より十一時に至るまでレセプシヨン（面接會）の會を開き數百人の來會者ありたるうち其の二十分の十九は悉く女性にて在りき當夜の壯大盛賑なる有様を目撃したるものは誰れとても男尊女卑の舊見識を打破し皆な女子に投票權を與へて差支へなきとを承認すべしとは見へたり。

○

明る日曜日には此時萬國より來會ありたる婦人方を百歳の好機として所々の教會に請じ朝集の說教を請ひたる塲所も多かりき左れど先づ當大會の面々は此日午后二時半より公劇塲に集りて安息日を守る塲内には各國の旗章を合衆國の星光章に交へて綢繆とひるがへし三千餘人の聽衆四方の壇上壇下に群集す本會の議員は正面の舞臺に列し正三時を報ずるときアンソニー孃主會と爲り宣教師ハナフホルド女史朗唱して會衆悉く之に吟和す次に宣教師ポールス女史使徒行傳ポウロ及アグリツパ面接の段を朗讀あり宣教師ブラツクエル女史祈禱を捧げ終つて宣教師セウ女史驚くべきの說教あり題は行傳二十六章十九節にして「是故にアグリツパ王よ我々は天の現示に背かず」と云へる所ろ、主旨明晰演述熱心にして非常に聽衆を感動せしめたりき。

右は本會の正集會にて會員が他の教會にて說教したる亦頗ぶる多しリバモア夫人は此夜天界教會にて說教しウイルラルド孃は主府メソデスト教會にて社會の聖潔と云へる題にて論述ありラスロツプ夫人はレーランド會堂にてカイフヘル夫人は合同メソデスト教會にてサクソン夫人は此の主府教會にて其外數氏の夫人何れも皆それ〴〵の說教ありぬ。

○

扨ても其翌三月廿六日には即はち待ちに待ちたる正會にてリツグスハウスの塲内聽衆例の如く多かりき既に時刻と成ればアンソニー孃會を主どりて宣教師ブローン、ブラツクエル夫人を紹介し米國にて（蓋し恐らく世界にて）最始の女宣教師と爲られし婦人なりとて之に開會の祈禱を乞ひ次に讃美歌を唱したるのちアンソニー孃短簡に演述して云く

今を距る四十年前始めて婦人の集會を催したるとき當時別段に發起人の姓名をば公けにせざりしとは云へ實際其事に尤も多く盡力ありたるは即はち費府のモツト夫人及び今日玆に出席あるスタントン女史なり尚後四十年間に吾等女性に對する世上の取扱ひ抑も幾許りか進歩したるや」

と慨歎しつゝ右スタントン女史を紹介せらる。女史は拍手喝采くづるゝが如き前面に立出でゝ演說せられたる大畧は左の如し。（未完）

特別廣告

東京婦人矯風會錄事三月分

一四日米國矯風會會長「ウイルラルド」氏ヨリ本會ニ向ケ書狀壹通請願書雛形二葉並「ユニヲンシグナル」一部外新聞二葉着セリ

明治廿一年三月十日土曜日午後第三時矯風會議員會ヲ麴町櫻井女學校内ニテ開會ス

本日議員開塲書記トシテ小島淸氏ヲ指命ス因テ以後同氏筆記ナリ

第一祈禱

次ニ會頭各員ニ向ツテ左ノ件々ヲ議ス可キ旨ヲ命シ併テ此事ノ最モ必要ニシテ且ツ矯風會員タル者ノ義務タル可キ旨ヲ勸告セラレタリ

議題

一世界万國政府ニ向テ請願事件ニ付其記名ヲ爲スニ如何ナル方法ヲ用ユ可キヤ

二日今演説會ヲ開クハ必要ナリヤ否ヤ

三事務所設置ノ方法

第一項ノ議題ニ對シ北部ノ議員古市靜君ノ動議即チ其主意ヲ畧言スレハ本邦ノ如キ無教育ナル婦人ニシテ斯ル大事業ニ關係スルハ到底不穩ノ議リヲ免レザルノミナラス政府モ亦之ヲ許可セザルヘシト結局此請願書ニ記名スルハ不可ナリトノ事此ニ於テ佐々城氏ノ駁議アリ又會頭ハ此ノ動議ハ本題ヲ誤解シタル者ナリトノ説明即チ本題ハ請願書ニ記名スルノ可否ヲ議スルニ非スシテ其方法ノ如何ヲ議スル者ナリ再言スレハ姓名記入ノヿ勿論不同意者ヲ除クノ外我等ハ喜ンデ之レヲ斷行セント欲スル者ナリ因テ以上ノ動議消滅ス此ニ於テ議事ノ本案ニ入リ順次ニ各員ノ意見陳述ノ後佐々城氏ノ説ナル各部會ニ於テ請願書ノ裏面ニ其姓名ヲ記シ來ル四月中旬ニテモ本會書記ノモトニ送附スベキ事ニ議決ス

第二議題ニ對シ種々討議ノ末之レヲ延引スヘキ旨議決ス

第三事務所設置ノ事ハ閉會ノ時刻ナルヲ以テ之ヲ次會ニ廻シ閉會ス

本日來會拾四人

明治廿一年第三月廿四日午後二時ヨリ佐々城宅ニ於テ議員會ヲ開ク時ニ會頭小痾ニ侵サレタルヲ以テ書記代リテ議題ヲ提出ス

第一祈禱ヲ以テ開會

議題

一矯風會ニ於テ大祈禱會ヲ開クベキ事

各員贊成ナルヲ以テ可決ス

但シ來ル四月第二土曜日午後第二時開會場所ハ假リニ數寄橋敎會ト定ム淺井柞氏ヲ以テ主會者ト定ム

第二公論新報カ矯風會ニ對シテ誹毀セシ辨駁ノ方法ヲ議スル事

種々議論ノ末遂ニ法律上手讀ヲ問合スヘキ事ニ決シ一同退散セリ

本日來會者十五名

三月中書狀端書新聞七十二入

同　同　規則勸告百五

同　會用遊説並雜誌其他ニテ二十七ヶ所

三月中入會者六十五名

東京婦人矯風會

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

交詢案内

●雇ひたき方（甲）

一 機織　府下にて十二三より以上の女を數百人機織に雇ひたし（神田紺屋町十一番地藤原方）

二 學婢　十七歳以上にして小學校卒業同等の學力あるものにして三ケ年入塾して差支なきもの試驗上雇ひたき學校あり

三 家婢　十五六歳のもの小間遣に雇ひたきものあり尤も毎日外國女教師に附け一時間宛英語を學ばすとのこと

四 家婢　十六歳より二十歳位の間にて柔順なるものを雇ひたきものあり餘暇を以て讀書算術習字裁縫等を教ゆと云ふ

五 家婢　年齢二十歳位身元慥にして正直に臺所を能く働もの一人一圓五十錢位の月給にて雇ひたきものあり

六 乳母　乳母とは言へ乳を要するにあらず基督教主義にて小兒を養育し得るもの月給は食料の外二圓位にて雇ひたし主人は醫學生家族八人内下婢二人家事に頓着するに及ばずと

七 保姆　地方高等小學校に於て幼稚科の保姆を雇ひたきものあり月給八十三四圓位まで基督信徒の方を要すとなり

●雇はれたき方（乙）

一 教師　師範學校女子部の卒業生にして府下の何方へか教授に行きたきものあり

二 書師　洋畫の女教師となり得るものあり廿歳前後時間多らずば女學校の教師となりたし

六 奉公　地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七 裁縫　年齢廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇へれ度き者あり華族様か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならむ通いても宜しとのこと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

八 教師　地方女子師範學校卒業生にて教育に從事し居し者東京にて四五時間は教育をなし餘は自分の勉强時間と定め八圓より十圓までにて雇はれたきものあり尤も洋人の居る處ならば何處にても宜し

九 奉公　東京高等女學校卒業生にして英學を修めんとすれども學資に乏しく依て己れを棚する丈にて西洋人若くは貴婦人方の左右にありて小間使となり傍ら勉强したきものあり

●喜びのめぐみ

一 乙第五號は本郷某女學校と相談まとまりたり

二 乙第四號は深川冬木町の某と相談まとまりたり

三 乙第三號は或方にて相談調ひし由申越されたり

中島湘烟女史著

善惡の岐

定價金五拾錢　給入美本

●日次○野鐵とも言へ未開とも言へ實に太平の里なるべし○高島田よやの字の娘五分さかやきに無川の浪士○紅潮端な、上る佳人の面○一樹の名花春動く初○豁間の清流も都の泥水なりしを知らずや○雙腕の勇餘す所なく滿腹の智遺す所なし○撫松庵のみ能く撫松庵の胸中を知れり○痴夢情烟春月暗○難知一滴愛情水散湧奔波激涙來○世上の功名灰塵に異ならず○錢囊痩腹裡飢以て天下の經濟を論ず○貧生の慷慨特に足らず○高路の君子にして袖の下を嫌ふものはあらじ○双蝶花に戯れて春情あり○觀樂のある處悲愁の伏する處○姉妹の談濃かにして春窓の烱微かなり○怨もなく怒もなきは交りと愛と共に新なるによる○撫松庵が胸邊寒く吹き送る巖間の風ぞ腥し○世難海より深かく人情紙よりも薄すし○會離縁ありて應報争ふべからず○優なる哉水盤人事の齷齪を嘲る○情人の艶話唯閑雲の聞くあるのみ○上帝親なく唯善人に與みす○客窓涙あり孝子の情○茲に因ありて茲に果あり○人間の歡樂一場の夢○墜葉翻つて力なく懶禽啼て恨あり○地下の白骨土いまだ冷かならず病窓の美人恨愈多し○開花原是落花風○人の死する其の言ふとや善し。

●賣捌○本社、銀座博聞社、原金港堂

統計局次長世良太一君序○統計協會議員呉文聰君序
通今居士横山雅男君著

婚姻論

定價金三十五錢　郵税十四錢

此の書は通今居士横山雅男君の著にして全編を二十八章に頒り。總論。婚姻の定義。婚姻は人類の天性。婚姻の効力等より說き起し早婚。晩婚。私婚。血族婚。離婚。一夫一婦の正婚など悉く歐米の統計上より論及し議論正確文章平滑一讀我國舊來蠻風の結婚を改良すべきの必要を感ずるの書なり

發兌　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

小生日々女學雑誌社と明治女學校の間に往來致し毎々來訪諸君の光來に接すると（を）得ず甚だ失禮と存じ候に付き此段左の如く畧規相ひ定め置き候間右御承知の上來駕を辱ふせば幸甚に候

女學雑誌社々務に關する事件は社員よ御談じ被下度尚ほ小生直面接可申上儀に候へば土曜日午後四時より七時までの間に來社を請ひ度候事

明治女學校々務に關する事件ハ同校幹事に御談じ被下度尚ほ小生直面接可申上儀よ候ハゞ毎日午後六時より七時迄の間よ來校を請度候事

辱知諸君　巖本善治

鐵筆將軍著

明治之細君

定價金八拾錢　郵税金貳拾錢　クロース製極美本石版密畫入

書籍の良否は世間自ら公評あり故に本書は流行の奴隷となり賣藥の效能書然たる過賛を喋々せず然れども其果して世間流布の二三十錢の安物と其價値を同ふするか其文章は何如其意匠は如何其用紙印刷挿畫製本等は如何請ふ江湖の諸君御購讀の上此等の諸問題を解せられよ

東京本郷元富士町二番地　盛春堂發兌

○高等小學校教科用　文部省撿定濟及減價廣告

藤尾六郎君著　田口卯吉君序

實地應用 家計簿記法

附 帳簿書式

全一册　改正價二十錢　郵税十四錢　舊定價四十錢

同 例題

全一册　改正價十錢　郵税十錢　舊定價十八錢

此書や唯朝夕數字をだに記入せば一家の出納細大漏さず之を明にするを得せしむる者にして公私の學校生徒ハ固より官吏會社員農工商に論なく凡そ一家を經營する者は必ず購讀すべきの要書なり

○發兌　東京々橋區彌左衛門町　經濟雜誌社

○賣捌　東京小林、丸善、博聞社、集成社●大坂梅原、丸屋●京都大黒屋●横濱丸屋●仙台金港堂支店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

基督教新聞

第二百五十號 明治廿一年五月九日發

社說○日本基督教徒の重任(完)●教報○在京、群馬縣人、在京房州人親睦會○京濱婦人大祈禱會○全國各地諸教會の通信○海外教報●說教○受るより與ふるは福なり●史傳○回々教小史(第五)●雜錄○獨逸鼎足美談○片言珠璣●雜錄○前週彙報等●一冊定價三錢每水曜日發行

發行所 東京々橋區日吉町二十番地 警醒社

北部婦人矯風會演說

五月十六日第三水曜日午後三時より本鄉春木町三丁目本鄉會堂に於て婦人矯風演說會を開く○傍聽無料有志の方は何人にても來聽あれ

辨士 伊勢時雄君 演題 現今日本婦人

花の廣告

當園の躑躅花の眞盛り諸君來て縱覽あれ

南豐島郡大久保百人町 躑躅園幹事

百色牡丹

抑も弊園義は牡丹の老舗にして數年來各種の牡丹栽培致し候故水本議官の御勸めにより明治七年始めて飾り附け致候處培養其の宜きを得て本年の如きは實に滿足に出來候間近邊へ御出の節御遊覽可被成候也

百色牡丹本家 上駒込傳中 高木喜兵衛

發兌

月					
四月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
五月	五日	十二日	十九日	廿六日	
六月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
七月	七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價

一冊。五錢 郵稅。一錢 (但府內無郵稅)
十冊。四十八錢郵稅。十錢 (同前)
半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢
一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を要する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し上品不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍類は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 sen. By post yen 1.43 six months, yen 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町闘々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新乢町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田晃貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥章堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年五月十日印刷
明治二十一年五月十二日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷 東京下谷區仲徒町三丁目七十一番地 森田豐